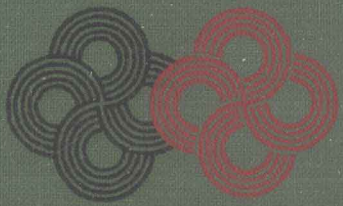

雲錦随筆＝暁鐘成
松屋棟梁集＝高田与清
橿園随筆＝中島広足
近世女風俗考＝生川春明

3

日本随筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成　第一期　第二巻
昭和二年五月廿八日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
代表　早川純三郎
発行者　吉川半七
発行所　日本随筆大成刊行会

日本随筆大成
〈第一期〉3
昭和五十年四月十五日　印刷
昭和五十年四月三十日　発行
編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京二四四番
製　作＝株式会社　たんちょう社

解　題

本集には、雲錦随筆、松屋棟梁集、橿園随筆、近世女風俗考の四種を収める。

雲錦随筆　四巻

暁晴翁著

本書巻頭にある大阪の人、葦間蟹満の序の中に、「著者は江戸から筑紫に至るまで旅遊して見聞を博くした」と云う。而して『淡路国名所図絵』、『天保山名所図絵』等の編者でもある。晩年の著である本書の内容豊富、多彩なる事は言をまつまい。その見聞に係る異事、奇蹟、特に劇道、伝奇界の事などを考説したものも多い。多才で、自らも絵を書いたと思われるが、友人松川半山筆のものも本書中に見える。内容は、「木国の御綱葉並全図」以下「松永貞徳伝」に至る百余項に及ぶ。鐘成の略伝は、第二巻「尚古造紙挿」の解題に附したのであるが、大東急記念文庫蔵の畑銀鶏自筆、『銀鶏雑録』中に、難波在留中諸家の略伝を草して居る中に一文があり、此れが二巻先述の菅竹浦氏の示教とも亦余り重複しないようであるから、次に記しておきたい。

心斎橋筋博労町

戯作者

暁鐘成

専門は、大内に遣ふ処の諸道具を商ふ。家を普請橋造にて、いときらびやかなる見世なり。傍なめもの又短冊などもあきなへり。著述はくさ〴〵あり。能人の知りたる、彼堀さらひのことを記したる国恩教諭湊のさかえといへる二冊ものなり。其他かは御影詣のしやれ本初編、二へん、三編あり。近頃のあたりものは菊池軍義なり。これは自画にて大本也。今又天保山名所図絵といへ

るを含めり。草稿半出来なれば、程なく出版たるべし。

とある。これは銀雞が天保五年霜月初。浪華の旅亭で草したものである。この天保山の事は、本書第二巻に「天保二年辛卯の春云々」として見えている。森銑三著『随筆辞典』には「書肆の注文に応じて作製したらしく、漫然と雑事を記しているといふに過ず」として、巻二の末の一話、中村仲蔵が、御家人が俄雨の中を破傘をかぶって走る姿を見て、忠臣蔵の定九郎の扮装所作等を改めた逸事等を一例として挙げておられる。此のような演劇関係の記事は相当に多く、著者の好みのよる所と云うべきであるが、此のような逸事を世に流布させた一役を本書もかっているのではあるまいか。鐘成は、万延元年十二月十九日に獄死しているから、本書は其の遺稿として文久元年の蟹満の序を附して発刊せられた事であろう。

松屋棟梁集　一巻　刊本

高田与清　著

本書と同じ著者の随筆『松屋叢話』は、著者の周囲の見聞を筆にまかせ、心のままに記した随筆であった（第二期第二巻所収）。然し本書は前書とは異なり、巻頭の「隅田河埋木文台記」以下「寄猿渡盛章記」（与清門人、武蔵大国魂神社祠近江守）に至る六項に大分せられているが、各項それぞれに細分あり、古今の諸籍を引用、博捜考証を究めたものである。初めの項は、「隅田河の名義」から始って「富士川浮橋の古図」に終るが、これが文化十三年の執筆である。文台のことは「そのふる木もて文台つくれるを、輪池屋代翁ひめもたり云々」などの記事も註記がある。この「文台の記」であったか、木版刷の字を白ぬきにした一枚刷があって、静嘉堂で見た記憶があるが、今其の何にあったかが思い出せない。与清も或は弘賢とも此の時知友の関係にあったであろうか。而して此の項には武

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

蔵国石浜の図の写があって、此れが高島千春の筆に成るものである。次の項「答二赤松知則一書」、「関東関西」の論から、「武蔵坊弁慶」の考証等と云うように多彩を極めている。今其の項目等は目次にゆずって、与清の国学者としての足どりを辿って見よう。

享和元年、年十九歳にして、村田春海の門人となる。この九月廿九日本居宣長歿す。年七十二、

享和三年六月実父田中本孝歿す。年六十三、通称忠右衛門、字は笠文、添水園と号す。

享和三年九月、見沼通船高田好受秀次郎の養子となりその長女千勢に配す。与清年二十四。庄次郎と称す。

文化元年末には、村田春海、山本正臣、藤原(福田)務廉、長尾景寛諸子と日本紀を読む。書紀中不審のこと多し。而して正義得るものなし。こゝに於て余発憤傍諸説を捜求して、別校本を定め以て之を蔵す。此時に当てや書を伊勢国本居氏許に寄せ其校本を請ふ。本居氏之筆工謄写して家に遺すの本是也。松屋源与清記

これは静嘉堂文庫蔵の与清自筆本の識語である。漢文で草してあるのを今書流しに書したものである。

文化四年七月催馬楽跋成る。(楽章類語抄第三巻)

同、九月宇都保物語を草す。

文化九年三月俳諧歌論前編を須原屋茂兵衛より上梓す。同五月山岡明阿本により、愚管抄を校合す。

文化十一年三月村田春海の遺稿大井三位物語を、竺志船物語傍注として刊行す。為めに清水浜臣と確執を生ず。

なお高田与清の後年の諸友との校書交遊の生活については『擁書楼日記』が国書刊行会本によって流布しているから、それを見られたい。なお、本書には当時殊に親しかった、師家の村田たせ子、岸本由豆流の序と、片岡寛光の跋を附して刊行されたが、二巻以後は稿本のまま伝えられ、現在は早稲田大学図書館に珍蔵されている。其の裔である高田早苗博士の許より寄贈されたものである。本書再刊に当り、荒木功光氏は其の調査に早大図書館を訪われたのであるが、其の結果は左の如くである。

棟梁集　小山田与清自筆稿本（題名に松屋の二字なし）文政元、三、四、八、其の他

一―二巻欠。

三巻以下十三巻まで十一冊まで存す。

三巻欄外に「歌学大成」の印記あり。内容題詠の歌集。

四巻も同じ。

五巻、棟梁集文部とあるが、殆んど題詠歌集である。只左の三文がある。

隅田定保が稲の屋の記、北条時隣が桜室の記、翠柳軒記、自筆校正本。

六巻以下十三巻に至る各巻は、皆題詠歌集である。

以上に依って未刊の棟梁集と刊本の相異がはっきりした。小山田与清の研究も先ず、この早大図書館本、水戸彰古館本（幸に戦災焼失をまぬがれた）、それに静嘉堂其の他の蔵書などの調査によって完成させられねばなるまい。幕末国学者殊に索引考証学者としての業蹟等一朝一夕に成し得る仕事ではない。

小山田与清に関しては、紀淑雄著『小山田与清』（偉人史叢十八）『擁書楼日記』（近世文芸叢書十二）菅井まさ子稿「考証家小山田与清」（文学遺跡巡礼十五、学苑五ノ三）其の他研究書も多い。

檀園随筆　二巻　刊本

中島広足　著

本書は幕末の歌人であり、また国語学者としても業蹟のある著者の随筆であるから、内容も自らその関係の記事が多い。先ず古来口伝として云いつがれた水乞鳥、百千鳥、喚子鳥、稲負鳥を初めとして、六十余項に就いて古来の説、近世の学説などを紹介して自説を加えている。此のような考証を行うについて古文献を挙げながら、伴信友、中山美石、橘守部、上田秋成、清水浜臣、石川雅望等の説をかかげ、自説を陳べている。又佐々木春夫が歌の評と云うのもあって、加納諸平、小林元雄等の評を記した後に、又自らの評をつける等して、其の交友関係なども窺い見る事が出来る。海野遊翁より香川景樹におくりし消息ふみには、遊翁が景樹東行中すみだ川のほとりの旅館で終日物語の節に「しらべの説」を聞いた事を陳べた事があり、以来、遊翁は景樹を尊重する事であった。而してこの景樹尊重は『師説随録』（一名葉舟夜話）にも見えていて、其の影響が江戸の其の他の歌壇にも流れたとすると、景樹の東行も一般に云われているほど意義のなかったものではなかろう。本書には勿論此のような事ばかりでなく、『沙石集』を引いて、梶原三郎兵衛尉が「薦草あさかの沼にしげりあひて、いづれあやめとひきぞわづらふ」の歌に依ってあやめの上を得た話も出ている。決して言痛い雑筆ではない。

本書には、嘉永四年の冬の、賢木園鈴木高鞆の序があって、刊行は七年である。鈴木高鞆は通称は武雄、父は直道と云って周防宮市松崎神社の社祠で国学者であった。高鞆は其の長男で、影響を受けて和歌をよくした。広足の門人で著書の出版等の事にも従ったと云う。本書下巻「あか水」には其の考が見えている。最後に注記したい事は檀園の家名は、年三十歳文政五年正月より称したと云う事で

ある。未刊の『橿園集』三に其の記事が出ていると弥富破摩雄の『中島広足』に出ている。彼が未だ長崎に行かぬ時の事である。

本書再刊に当って、東京大学総合図書館の掲載許可を得て、本書印行に大いに便宜を得た。同館司書杉村英治氏其の他同館の方々の厚志に感謝する次第である。

中島広足　国学者、寛政四年三月五日、熊本塩屋町裏小路住の中島惟規の長子として生れた。初め嘉太郎と称し、惟清と名乗り、俊太郎とも云った。文化十二年以後は春臣と改め、広足と改めたのは文政九年七月以後である。其の他広川、弘足、於曾麻、蛭丸等とも称し、橿園と号したのは文政五年以後である。享和二年十一歳にして父を失い、其の跡を継ぎ、藩主細川家より二百石を給せられた。文化三年から同十一年までは御小姓時代として最も栄誉ある時代であった。此の時代には四回江戸にも出で、文化七年頃には、一柳千古の門に入り古学及び歌に手を染めるに至った。千古には大変信任を得たが、やがて宣長門人の長瀬真幸の門に学ぶに至った。然し彼の健康は、その勤仕を果すに不都合な様子になったので妹に養子を迎えて、隠居の身となった。此れが文化十二年、広足二十四歳の時である。此の時に惟清を春臣に改めたのである。

文化十二年から文政四年に至る七年間は、島崎村在住時代として、身は自由であるが、最も鬱屈した時代であった。が此の時代も四年七月に岡部東平の訪問によって、展開が見られた。九月には東平は九州に行ったのであるが、五年十月東平の住する長崎に広足は旅立ったのであった。ここには、青木永章、近藤光輔等本居門人が居て親交を得、滞留一ヶ月に及んだ。これから広足の長崎時代が開け、文政五年至十二年八年間、天保元年至弘化四年十八年間、嘉永元年至安政三年九年間と、三十四年の活動時代をここに過す事になる。学者として、歌人としての業蹟を残したのは実に此の時代であ

った。こゝに至っては、伴信友も「草稿御批評は勿論、てにをはの違ひ、文段のわろきなど、一つ漏れず御加筆被下慶奉希候」と信頼し、橘守部も亦、「檀園大人、学と云ひ、御風流と申し、不堪欽慕候、殊更御歌の御手際御秀絶、当今江戸にはカバカリノ人、一人も無御座候。」と云い送っている。広足は和歌に「遠目鏡」「望遠鏡」其の他新来の事物を詠みこんだり。更に「やよひの歌」の西詩翻訳なども知られている。「当時御歌の御手際御秀絶」の語もある事であろう。広足は此の時代には諸方の学者との交遊もあり、弘化元年には大阪の惣年寄役今井克俊等によって、大阪に住する事にもなる。此れが安政四年より文久元年に至る五年間で、最も得意の時代である。

文久二年から元治元年までの三年間は、国学師範時代で、熊本に帰り時習館出仕となり、功成り名遂げた時代である。

文久四年（即元治元年）正月病を得てその廿一日に歿した、享年七十三。熊本県飽田郡春日村万日山の墓所に葬られた。法号春峰院朝陽詠花居士。著書は夥しく多いが、今は『中島広足全集』二冊、（横山重・弥富破摩雄編、昭和八年刊）を挙げておく。この全集中には本大成本の刊本とは別の草稿本二巻の『檀園随筆』が収められて居り、森銑三著『随筆辞典』には「はま弓以下百四十余条」が収めてある事の紹介があり、傾聴すべき言説の多い事を報じて居られる。

中島広足伝に就いては、弥富破摩雄著『中島広足、肥後先哲評伝』（日本談義四巻五号）の中に「中島広足」弥富破摩雄稿等がある。なお国立国会図書館には弥富破摩雄の旧蔵書が一括されて居り、此の中には春臣時代の自筆本もある。

近世女風俗考　二巻

生川春明　著

本書の発刊及著者の略伝は、本書巻頭の四方梅彦の序と大槻如電の伝とによって、今更加うべきものはない。明治二十六年東陽堂で石版で発刊された本書は、其の後版を重ぬること数回大正四年の刊本に及び、遂に本大成に収められたのであるが、上記の二文等を逸してしまった。今また発刊の期も迫って之を補ったため、両文は活字印刷にして僅に其の欠を補った。本書には、跋文に、「天保九年いぬの冬日、八十あまり三とせの翁、山崎よし故」と云う一文があり、次に「天保九年戊戌四月彫成、好問亭蔵板」とある。其の次に、

生川春明近刻書目

誹家大系図中編二巻、下巻三巻

奇迹職人考三巻、古画大図八

近世女風俗考二巻

慶長元和の頃より享和文化の頃まで、女粧ひ、古今の沿革を論じ、いにしへの質朴なりしありさまをしめす。かつひとつひとつめづらしき古画をあらはして証とす。

伊勢あみかさ三巻

伊勢ひと国にありし所の雑事を記す。是も古画を同しく摹して、読むにうむことなからしむ。そのいふ所は、古市のあそびやの古図、よめたたき銭、宮川田楽の起原、伊勢びくに、宝永おかげの古図、相の山ふし、かかるたぐひ、なにくれとなく考しるす。

浮世絵師系譜一巻

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

此書は花田内匠、吉田半兵衛、菱川師宣のたぐひ、三都に名高きを、ふるきとなく、今の世といはずことゞくあらはす。又先哲の書どもに考られたる岩佐又平といふ人、ふるきものに、たしかなる証なし。これは延宝天和ころ、京師丸太町西洞院に住せし浮世絵師又兵衛がことなるべし。是らの事も此書につまびらかなり。

此等の本は、一応天保九年頃には完成していたかと思われる。

この天保九年には、『誹家大系図』二巻『翁発句助辞一覧』一冊等も刊行されて居り、俳人、及国学者としても一家を成して居られた事である。春明の著書に就いて、最後に注意すべきは『役者評判記古今題名通覧』であろう。此れは、郡司正勝氏が『歌舞伎評判集成』五に一文を草して居られ、此の書が早大図書館に現存する事を報じて居られる。『役者評判記古今題名通覧』は、嘉永元年の年記で終っているから、その頃の著述であろうとし、『女風俗考』にも『役者評判記』がしばしば引用されている事を注記して居られる。この春明の稿本は水谷多彦旧蔵本である事の注記もある。此の辺でいささか蛇足であるが、生川春明の伝の略記まとめをしておきたい。

生川春明　伊勢岩田町薬種商生川清八の男、通称三良助、義五郎、熊五郎、武介、春明（はるあきら）（俳名、画名）、五十二歳剃髪後正香と称した。好問亭、黄中とも云う。俳諧は前川春桜門人、国学は足代弘訓門人、画は樋口嘉樹門人と云う。又彫刻に巧であったともいう。蘭学にも通じ、写真術を習い此れを業とした。明治二十三年八月廿日歿した、歳八十七。津市阿漕町円教寺に葬す。高木蒼梧著『俳諧人名辞典』には其の著書に、一代の述作約四十種、国語に関するものに『歌学類言鞆の響』八十九巻を挙げ、風俗関係に『近世男風俗考稿本』『職人考』を挙げているのは注意すべき事かと思う。

六十一の春を迎えて、

六十有さに一をかさ年て老にけり

春明は後年保元物語の奥に左の如く記している。

明治十一年十一月四日、七十六翁生川正香

よしなしとおもふしたよりおもはれてとどめがたきは心なりけり

人柄を偲ぶに足る吟詠である。これは三村三郎著『本の話』に載する所である。

本稿を草するに当り、川崎市蔵氏の示教にあずかった。厚く御礼申上る。

目次

雲錦随筆……一
松屋棟梁集……一四九
橿園随筆……一九九
近世女風俗考……二〇七

（解題　丸山季夫）

曉晴翁著

松川半山畫

全四冊

雲錦隨筆

書肆

文榮堂

龍驤堂

はしかき

暁の翁ひさしき年ころ、鳥かなく吾妻よりして不知火の筑紫のはてまでゆきかよひつゝ、いにしへ今のみやひことさとひこと何くれと見聞およへりしことを、和田海のふかくかうかへて、大船のおもひ得たりしすちどもを鴫の羽ねかき書すさひたりしが、いち柴のいつしかかゝるとちふみとは成ぬる。これを空蟬の世に広めなば、玉たれのたれかめてはやすらむと、かきほなす人々そゝのかしつれとも、翁いなみのいなみてくまつゝら津々羅このそこにひめおかれしを、白真弓いたつらにしみの住かとなさんもさすかにて、翁にしたしき友とちたれかれさらにおもひおこして、こたひ絵をさへくはへて、花くはしさくら木にちりはめうちわたす。をちこちに伝ることゝなんなりぬる。文久とあらたまりたるとしの水無月のはしめつかた、翠栄堂のあるしのこへるまゝに難波にかくろひすめるあし間の

蟹　満

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo